

言語の自立性と人称代名詞「私」

——デリダの現象学的言語論について——

高井 雅 弘

発話状況においても、一人称代名詞「私」の指示する対象はその語を語っている当の主体自身とは限らないという見解を私はこの論文で明らかにしたいと思う。このような主張は語る主体からの言語の自立的存在性格から生じるものである。

この主張を述べる為に、デリダの『声と現象』におけるフッサール論を経由するという方法を取る。フッサールの『論理学研究』における言語論の解釈において、デリダは著しく言語の自立的存在性格を強調している。私自身もフッサールの言語理解において、それを本質的に把握する彼の手続きを検討する限りでは、言語の自立性を肯定する主張を、明示的ではないが、十分含んでいると考える。私はまず現象学的な見地からの、言語の自立性論の可能性について論じる。現象学的な言語の自立性論の基盤は、対象と意味との根源的差異、及び対象を直接見る作用と意味を理解ないし志向する作用との差異によって与えられる。私はデリダがこのような差異を、フッサールの認識論あるいは潜在的な語用論的意図に抗して、還元不可能なものにまで徹底化しようとしている事を明示しようと思う。デリダはエクリチュール（文字）という範例を手掛かりにして、言語の自立性を確認しつつ、現前の形

而上学の解体を試みようとしている。そして彼は一人称代名詞「私」の現象学的分析に関しても上記の差異を厳守している。さてクロード・エバンスはデリダの「私」という語に関する脱構築的理解に批判を加えている。彼はデリダのフッサール理解には不十分な点があると言う。私はこのようなエバンスのデリダ批判をも考慮し、かつエバンスへの反論を提示したいと思う。そしてこういった論述の過程を通じて明らかにされる、語る主体に対する言語の自立性の基盤、つまり言語は全時間的存在者であつて、物理的事物や人間の思考のような時間的存在者とは専ら偶然的にしか関係しないという観点から、虚構の人物が語る「私」の例を用い、言語としての「私」の使用はそれを語る主体自身の心を必ずしも直接的に指示しないという結論を引き出したい。

1 フッサール現象学における言語の自立性の主張

まず、現象学的な言語の自立性の主張を明らかにする為に、フッサールの『論理学研究』第一研究における有意味性の規則を確認しよう。フッサールにとって最終的に無意味となる言語「表現」とは何か。それは例えば「アブラカダブラ」という語のような、意味を持たず音声を持つだけのものや、また「緑はあるいはである」といった文法規則に違反したものに限られる。こういった表現のみが彼にとって有意味性の外部であり、それ以外の規則に違反したものに意味が欠けているとは考えられないとされる。したがって彼にとって現実的な、あるいは感性的世界に実在する対象に基づいた有意味性の規則を正当なものともみなすことはできない。例えば「ペガサス」という語は実在する対象を持つ「馬」とは異なり、翼のある天馬というもっぱら想像上の、あるいは虚構の動物を対象としており、この対象は明らかに実在しない。もし有意味性とは感性的実在と対応することであるとすれば、「ペガ

サス」という語を我々は理解できない。しかし「ペガサス」を無意味と断定することは、常識に訴えても、無理がある。フツサールもそうした現実的対象と意味との混同を犯しはしない。では現実的対象のみならず想像ないし虚構された対象を含む表現にまで有意味性の限界を緩めてはどうかという案が出て来るかもしれない。それがいわゆる意味の想像表象説である。この見解をとる人々は次のように主張するであろう。確かに我々は「ペガサス」を実際に知覚することはできない。しかしそれを想像において表象することができる。だから言語の意味とは想像表象であると言われる。この立場によれば、現実の対象ばかりではなく、想像によつて心像化され得るものも有意味と見なされる。しかしフツサールは意味の想像表象説も不十分であるという。彼は意味の想像表象説に対してデカルトの想像と知性の区別を用いて批判する。例えば、千角形を想像してみよう。それはどうあがいても不完全な仕方ではしか像化できない。言語の「千角形」という語の意味理解に関しても事態は同様である。つまりこの場合、完全な想像表象が意味の理解に伴って出現することはあり得ないが、この語の意味の理解は容易である。とすれば、意味の成立にとつて想像表象は不可欠なものではないとフツサールは考えるのである。「無限の数の素粒子」という語の理解に関しても同じことが言えよう。

またフツサールは「四角形は四つの角を持たない図形である」といった論理的に偽であると直ちに判定される文や、「木製の鉄は存在しない」などのような真ではあるが不合理な対象を指示する表現を含む文の場合であっても、すくなくとも不合理であるという事の理解を十分与えているという点で有意味であると主張する。現象学的な有意味性の基準とは感性的世界の対象の可能性にも、更には理性的世界の対象の可能性にも束縛されはしない。つまり彼によれば言語外的な対象性と意味の可能性とは厳密に区別されるべきなのだ。

そもそも、言語の本質を考える上で、検証可能な存在者のみを含む現実世界や矛盾律を犯さぬ限りでの存在者を

許容する可能世界に依存した規則を有意味性に押し付けることは強引過ぎると私は思う。もし言語が世界を生み出すとすれば、それは事実の真理どころか理性の真理をも無視する存在者を含むものとなってしまいうだろう。むしろフッサールにしたがって対象に対する意味の独立性が有意味性の基盤であると考える方が自然である。少なくとも意味の物理主義は避けられるべきだ。

対象と意味との差異の例としてフッサールは、フレーゲの *Bedeutung* と *Sinn* との有名な区別を開示する為の例、「宵の明星」と「明けの明星」と等価の「イエナの勝者」と「ワートルローの敗者」、また「等角三角形」と「等辺三角形」などの区別を挙げている。いずれも表現記号の指示する対象は同一ながら、その意味が異なる例である。このような例はすべてフッサールが以下のように主張する為のものである。「対象が意味と一致する (*ausammenfallen*) ことは決してない」。

こういった対象と意味との根源的差異を順守する見解がフッサール現象学における、客観的側面からみられた言語の自立性の基盤といえよう。

次いで言語の自立性の主観的側面からの現象学的主張について考察してみよう。フッサールは上記の意味と直観可能な対象との差異に相関的な、意識作用についても区別を行う。それは彼の用語によれば、「意味志向作用」と「意味充実作用」との区別と呼ばれる。前者はもっぱら対象への直観的關係を含まない意味理解の働きである。例えば「桜の花が咲いている」という文を理解する場合、話し手も聞き手も、ある庭園に実際に植えられている桜の枝を見る必要はない。あきらかに、桜の花が実際に咲いているか咲いていないかを把握する作用を欠いても、表現を理解する作用は成立する。このように語や文に意味を与える作用が意味志向作用と呼ばれる。これに対して後者の意味充実作用は意味を媒介として志向された対象を直観する意識の働きである。つまり意味充実作用とは上記の

意味志向作用に加えて、実際に桜の花が咲いているかどうかを確かめる意識作用である。この場合、実際に桜の木に花が咲いている事が確認されれば、この文は対応的に真であることが把握される。したがって意味志向作用とは対象の直観を必要とせず、言葉語りかつ理解することであり、意味充実作用とは対象を直に見ることによって言葉が真か偽かを調べる意識作用であると言えよう。意味志向作用は意味充実作用を欠いても成立する以上、意味充実作用のような体験は言語外的な意識作用であり、言葉を理解するのに必要な意識活動ではないと言える。

先程確認した対象と意味との原理的区別と共に、意味志向作用と意味充実作用との根本的な区別という、これら二種類の区別が、言語の世界に対する自立性を現象学的に根拠づけるものなのである。フッサールは後者の作用間にもみられる差異を以下のように言い表している。「二種類の作用あるいは作用連続が区別されるべきである。その一方は(……)表現に本質的な(wesentliche)作用である。この作用を我々は(……)意味志向と名付ける。他方のもは、確かに表現そのものにとって本質外(außerwesentlich)ではあるが、その代わりに表現への論理的に根本的な関係」、つまり「意味志向の対象関係を現実化する関係にある作用であり、「このような作用を我々は意味充実作用と名付ける」。特に注目すべき事に、フッサール自身が意味充実作用、つまり伝統的な意味での真理を成立させる作用を表現つまり言語にとつて本質的ではないと断言している点である。あくまでも意味充実作用やその相関者である「充実意味」は言語や言語に関わる意識作用にとつて全く「偶然的」(aventi)でしかない。しかしフッサールは自らが見出した言語にとつて本質的なもの(意味志向作用と意味)がそれから除外されたはずの偶然的なもの(意味充実作用と充実意味)と一致するという。彼によれば「充實的統一において志向作用が充実作用と一致し(Deckt)、(……)融合する」。このような合致ないし一致を成立させるものは言語にとつてあくまでも偶然的であるとすれば、現象学的な「真理」も、もし本質的に言語に基づいて成立するならば、専ら偶然的ではないか。

そもそも意味の理解とその対象の直観的認識とは互いに相入れないものではないか。フッサールは言語の徹底的に自立的な在り方を、すなわち言語の本質を厳密に見抜いたあまりその認識論的機能を「偶然的」とし、したがって「真理」という意味での存在(……)物と知性との一致 *Adequatio rei et intellectus* という意味での存在⁽⁵⁾が実は偶然的な存在であると暗黙の内に語っているのだと私には思われる。私自身、言語の現実世界に対する自立性を肯定することこそが言語の本質を認識する上で、また言語の哲学的使用の在り方を考察する上で、もはや乗り越え不可能な地平を形成していると考えている。

さて、このような方向、つまり現象学的言語論に潜在する言語の自立性の主張をより一層徹底化させる試みが、デリダの『声と現象』において行われている。彼によれば、「意味志向は対象の直観を本質的に含まぬばかりではなく、それを本質的に排除する(*exclure*)」とされる⁽⁶⁾。彼が言語の自立性を強調する理由、それは西洋形而上学を導いてきた現前の特権を解体するというモチーフから生じている。意味充実作用のような直観作用における対象の現前をその機能において必要としない在り方を本質的に持つ言語という存在は脱構築の恰好の範例であるからだ。直観において現前する対象への異質性という言語の本質を追及すればするほど言語は現前の形而上学への抵抗を増す。彼による現前の解体の措置は言語にとつての直観の対象ばかりではなく、語る主体の現前にも及ぶ。デリダが主張するまでもなく、周知の通りエクリチュールは意味理解における現前する対象の不要性のもとより、言語を使用する主体、つまり語る主体の直観的現前をも偶然的とする言語の在り方である。世界や主体に対する言語の自立性の徹底化はデリダが強調するエクリチュールにおいてより鮮烈な、そしてより明確な姿を現すといつてよいだろう。彼にとつて言語の本質、つまり言語の自立性を最も忠実に示す範例はエクリチュールに他ならない。したがって彼は以下のように言う。「直観的認識に対する意味志向の自立性(*autonomie*)、つまりフッサールが明らかにし、

そして我々が(……)言語の自由、『率直な物言い』と呼んでいた事そのものがエクリチュールの中に(……)自らの規範を持つ」。

これに対して、デリダはパロール(話し言葉)を言語の本質的事例として用いることは理論的な錯誤を犯しがちになると言う。その理由は言語そのものにとつて主体の現前があたかも本質的な事柄であると考えられてしまう恐れを含んでいるからである。そしてパロールを特権化することが言語の自立性という本質を曖昧なものにしてしまうからである。この特権化はパロールに偶然的に属しているものやその働き(作用)が、本質的なものと誤解される危険性を常に持つ。このようにパロールを重視する傾向を、フッサールの「本質的に偶然的な意味」の分析に認めることができるだろう。

2 本質的に偶然的な表現としての「私」

フッサールの一人称代名詞「私」の規定を考察しよう。それは「本質的に主観的で偶然的な表現」(wesentlich subjektiven und okkasionellen Ausdrucke)と彼が呼ぶものに属する。この表現は彼によつて「客観的な表現」と区別されている。客観的な表現とは例えば「人間」という語や、「二足す一は三である」や「ライオンは四足歩行の動物である」といった文のような、その語や文を語る主体やその主体が含まれる実際の特定化された発話状況を直観せずとも、話し手にとつてもまた聞き手にとつても十分にその意味が理解可能な表現のことである。この客観的表現とは逆に本質的に偶然的な表現はその意味の正常な理解を得るには、語る主体や発話状況の直観を本質的に必要とすると言われる。例えば「今、明日、昨日」といった語や、指示代名詞「これ、それ、あれ」、そして人称

代名詞「私、あなた」などがこのグループに属する。それゆえ一人称代名詞「私」という表現の十分な理解は本質的にそれを語る主体を、聞き手が直観することを必要とする。フツサルは言う。例えば、聞き手が「私は歯が痛い」や「私は雨傘を忘れた」という文を十分に理解する為にはこの文を実際に語る主体ない話し手が誰かを直観する必要があるということになる。フツサルによれば「その都度、『私』という語の意味はもっぱら生き生きとした発話やそれに属する直観的状况から引き出される」とされる。⁽⁸⁾つまりフツサルにとって、もし聞き手が、話し手の直観を欠いたなら「私」の理解は十分なものとは言えない。

「私」の理解にとつて特権的な地位をパロールとしての言語が持つことになるだろう。というのもパロールにおいて「私」に限らず、語や文を語る主体が常に状況に直観されるべく現前しているからである。ところがエクリチュールにおいては、明らかに書き手は、署名といった内言語的代理を除いて、読み手にとつて直接現前してはいない。エクリチュールとしての「私」には読み手に十分な理解を与える為の手掛かりすなわち書き手の直観的現前が与えられていない。例えば署名すら記されていない差出人不明の葉書に「私にぜひお手紙下さい」と書かれている場合、それを読んだ受取人は困惑を覚えざるおえないであろう。それゆえフツサルは次のように述べる。「誰が書いたのか知らずに『私』という語を読めば、我々は無意味な語を持つのではないにせよ、少なくともその正常な (normalen) 意味からはずれた語を持つ」。

さて書き手が誰か直観できない「私」を巡るフツサールの議論にデリダは以下のように反論する。『私』という語を理解する為に、私は『私』という対象の直観を必要としない。この非直観の可能性が意味 (Bedeutung) そのものを、正常な意味をそのものとして構成する。(……)。書かれた『私』の匿名性 (anonymie)、『我書く』の非固有性はフツサルが語っている事に反して、正常な状況である⁽⁹⁾。エクリチュールに対してパロールを特権化する

ることが、現前の形而上学に直結する音声中心主義を形成すると主張し、その解体を企てているデリダによってこのような主張を行うことは予想されることであろう。またフツサルが意味志向作用と意味充実作用とを厳密に差異化していたことを、ここで思い出そう。意味志向は対象の直観を必要とせず、意味のみを理解する作用であったとすれば「私」という語の理解においても、対象の直観を持ち出すのは先の作用の区別に違反してはいまいかとデリダは述べているのだ。対象の直観作用と意味の理解作用との間には言語の自立性によって保証される厳密な区別がある。

デリダは、例えば読者があるテクストを読む時、その著者が誰かを直観する必要はなく、それゆえ著者の現前と彼のテクストとは本質的な関係を持たないと考えている。更にデリダはパロールの理解に関しても同様のことを拡張する。つまり彼はパロール的状况においても聞き手は「私」を理解する為に、語る主体の直観を必要としないと主張する。この事はコミュニケーション的状况に限らず、語る主体自身が心の内で「私は歯が痛い」と独り言をつぶやく場合にも適用される。この場合でも、語る主体は自分自身が誰かを直観によって自覚することなく一人称代名詞「私」が含まれたこの文の意味を理解することができる。したがってデリダの立場からすれば、「私」という語の使用と自己意識との間にバンヴェニストの言うような直接的相関関係はない。それゆえフツサルがコミュニケーションに関わりのない「モノローグ (einsamen Rede) において、『私』の意味は自分自身の人格の直接的表象において本質的に実現される」と主張する時、デリダはこのようなフツサールの見解に対して、以下のように反論する。「私が自分自身の現実的直観を持つとうが持つまいが、『私』という語は表現する(……)ここでもまた充実する直観は表現の『本質的な構成要素』ではない」。デリダによれば、話し手は自分が誰かを知らずに、正常な仕方ですべて「私」という語を使用することができることになる。

しかし、上記のフツサールの文章に対するデリダの解釈には不備があると、アメリカの現象学者クロード・エバンスは指摘する。彼によれば、デリダはフツサールの上記の文における「実現される vollzieht sich」を、意味充実化であるとして、「自分自身の人格の直接的表象」を対象の直観によって意味が満たされた充実意味であると考えているが、この解釈には不十分な点があるとされる。その理由は私が理解した限りでは以下のものとなる。もしこの直接的表象を充実意味と解してしまえば、フツサールの先の文章に続く文「コミュニケーションにおける語の意味も、自分自身の人格の直接的表象にある」が理解不可能になる。つまりデリダのような解釈をとれば、モノローグの場合と同様の仕方でも充実した意味がコミュニケーションにおいて聞き手に理解されるということをも、この文が意味してしまい、そのような事は不可能であるとされる。エバンスによれば、フツサールの先の文における「直接的表象」は、充実意味ではないということになる。したがって彼によればデリダのフツサール解釈は誤っていることになる。

このエバンスのデリダ批判を私なりに検討してみよう。話し手にとつてのみ自分が語る「私」の対象すなわち自分自身の人格を形作る単独的な心を直接把握することが可能であり、それゆえ空虚な意味を十分に充実することができる。したがって話し手が語る「私」の意味は十全な仕方でも充実していると言える。一方、コミュニケーション的状况において、聞き手が話し手の心を直接直観することは不可能であり、それゆえ、聞き手にとつて「私」の意味を直接、十全的な仕方でも充実することは原理的に不可能である。現象学的に言うなら、他者（話し手）の心を聞き手が直観するには、自己移入のような話し手の身体などを媒介にした根源的に間接的ではない直観を手掛かりにするしかない。したがって「私」という語の十全的な充実意味は専ら話し手のみが所有するものであり、コミュニケーションにおいて聞き手が把握する意味が十全に充実する事はあり得ない。フツサールの先の文の主張のよう

に、モノローグにおける「私」の意味がコミュニケーションにおいても正常な仕方では理解されると考えるならば、「私」の意味はすくなくとも聞き手にとつてだけではなく話し手にとつても非十全的な直観でも得られることになる。

聞き手にとつて話し手が誰かを把握する十全的直観が不可能である以上、「私」の意味の正常な理解を得るにあつては自己移入（根本的に不十分な直観）に基づいたいわばある程度空虚な直観で足りるといふ事になる。このような解釈は正当なものである。ところが、エバンスはこのような解釈すら退けるようだ。彼は次のように言う。「聞き手はこの個人的表象 [individual presentation すなわち話し手の自分自身の人格の直接的表象] の直観的充実を持たずに、誰が話しているのかあるいは書いているのかを知るだろう」。エバンスはあたかも話し手の心の非十全的なものであれ直観自体が「私」の意味の正常な理解にかならずしも必要ないと考えているのだ。とすれば、エバンスのデリダ批判の本当の意図は以下のものとなる。エバンスの考えでは、フッサールはもとも「私」の正常な理解において自己自身のものであれ他人のものであれ心の直観は必要ではないと考えている。それなのに、デリダはあたかもフッサールが反対のことを述べているかのように誤解し、そして実はフッサール自身のものである主張を自分の主張として提示している。だからエバンスからすれば、デリダが脱構築的であると考えているフッサールへの反論は実はフッサール自身の見解であるが故に、反論というよりむしろフッサールの主張をただ繰り返し返しているにすぎない。しかしながら、私の見るところ、非十全的ではないとはいえず、フッサールは「私」の意味の正常な理解になんらかの直観を不可欠なものとして考えていると思われる。例えば『論研』第六研究において人称代名詞ではないものの本質的に偶然的な表現に属する指示代名詞を再び扱った際、フッサールはやはり「発言の状況、つまりこの場合なら実際になされた知覚を顧慮してのみ完全な意味を持つ表現であり」、また直観は知覚に限らず

想像でもよいと明言している。したがって、エバンスの解釈に反して、フッサール自身は「私」を含めた本質的に偶然的な表現を正常な仕方では理解するには、なんらかの直観が必要であると明らかに述べていることになる。フッサールにとっては、あくまでも「私」の意味を正常な仕方では理解するには、たとえ非十全的なものであれ、客観的表現とは異なり、語の対象、すなわち語る主体の直観を必要とするのである。エバンスの想定とは逆に、フッサールにとって、誰が書いたかを直観によって把握されていない手紙における「私」という語は、あくまでも異常な理解しか読み手に与えないのである。したがってエバンスのデリダへの批判は、フッサールの解釈自体に難点を持つがゆえに、十分なものではないと言えるだろう。

またエバンスはデリダが現象学的な「私」の意味が二層構造になっている事を無視し、その内の一つの層しか考慮していないという批判を行う。この批判を考察する為に、フッサールの一人称代名詞「私」が含まれる本質的に偶然的な表現についての理論を更に立ち入って確認せねばならない。この考察によって先程のエバンスのデリダ批判の不当性も、より一層明確になる。

フッサールによれば、「私」という語は常にその意味が「指示する意味」(anzeigende Bedeutung)と「指示される意味」(angezeigte Bedeutung)とに二層化しているとされる。以下「私」という一つの語に含まれる二つの意味の説明を試みよう。読み手にとって、書き手が「誰か」を特定できない文、例えば駅の壁に書かれた署名すらない「私の財布を探して下さい」という文をただそれだけを読んでも、例えば山田太郎が書いたのか、あるいは田中道子を書いたのかのかが分からないという点でその文から十分な理解を得られない。とはいえ、この文章は文法に違反しているわけでも、また表記の規則に違反しているわけでもなく、したがって壁のひび割れ模様とも混同されない。この文は書き手がその場に不在であるばかりではなく、自分が誰かを言語的に示してもいないが、少なくとも

「その都度の話し手（書き手）が自分自身を指示する」という理解を与えてはいる。それゆえ、この文はたとえ書き手（語る主体）が誰か、つまり読み手（聞き手）の立場から見て、文を使用している主体つまりその文を介して自己自身を指示する対象が直観されていなくても、なんらかの意味を持つ。このような意味をフッサルは「指示する意味」と呼ぶ。この意味はあらゆる発話および記入状況において、誰がその語を発したかに関わらず、一義的に理解される。したがって「私」という語の指示する意味は言語外的ないし言語内的コンテクストに全く束縛されていない意味と言える。しかしフッサルはこの第一の意味のみでは「私」の意味の理解は正常に行われないと考え、「指示される意味」という第二の意味を「私」という語に加える。その意味は彼によれば、読み手（ないし聞き手）が「私」を書いたあるいは発話している人物を、つまり書き手（語る主体）を（知覚に限られず想像も含めた）「直観」を介して特定化することで得られるとした。つまり「指示される意味」は特定の言語外的コンテクストに依存した、あるいは話し手が誰かという問いが不可欠な意味であるということになる。当然この指示される意味は対象の直観に応じて変化する性格を持つ。「私」を語るあるいは書くことのできる人物はすくなくともあらゆる言語習得者に及ぶからである。話し手や書き手が状況により変化するにつれてこの意味は変化する。それゆえ指示される意味は本質的に多義的な意味といえる。

したがって、「私」の意味は1、「その都度の話し手（あるいは書き手）が自分を指示するという」一般的ないし発話状況の直観に束縛されないものと、2、話者が誰かということが直観によつて（確かに聞き手や読み手にとつて語る主体や書き手という他者の心を間接的にしか直観できないという限界はあるが）確認された上でのものとの、以上二つのものが重なりあつて成立しているといえよう。とくに後者の「指示される意味」の理解には対象の直観といういわば言語外的作用と対象への訴えかけが含まれていることに注目しておこう。

さて話しを元に戻そう。エバンスがデリダを批判している理由は、「私」の「指示する意味」しか考慮しておらず、「指示される意味」を不問にしているという事にある。しかし既に確認された通り、フッサールにとって指示される意味は聞き手が語る主体を直観することを介してはじめて聞き手に与えられるものである。したがって、指示される意味を正常に理解する前提として直観は不可欠である。ところがエバンスは「この（指示される意味の）理解は直観的であるとは限らない」と言う⁹⁵。確かに第六研究においても、フッサールは直観ないし「知覚は意味を規定する作用ではあるが、意味を内蔵する作用ではない」と言い、対象の直観作用と意味の理解作用（意味志向作用）とを厳密に区別している。しかし彼はまた「明示されるものが、その瞬間の聞き手の視野に全然入って来ない」とすれば、差し当たり彼のこころの中には（……）不特定な一般的想念「指示する意味」が喚起されるにすぎず、したがって彼にとつては、それを補完する表象（直観的に明示されるものの場合には、直観的表象）「直観作用」をまつて初めて、その想念が何を指示するかが明確に規定され、（……）本来的な意味「指示される意味」が完全に構成される」と主張し、結局「私」も含まれる本質的に偶然的な表現の正常な理解に直観が不可欠であるという。つまり正確に言うなら、フッサールにとつて、実のところ今まで懸案になっていた意味の充実というよりむしろ指示する意味の不特定な対象方向（「私」の場合、あらゆる状況における自己自身を指示するその都度の話し手への指示）を特定化する為に直観が必要なのである。この指示する意味を志向する、直観を欠いた、作用の対象方向が直観によって特定されることによって、指示される意味がはじめて志向され得るのである。確かに指示される意味の志向ないし理解そのものは直観する作用とは異なる。この点でエバンスの主張も正当なものである。しかし指示する意味を志向する作用の対象方向（フッサールによれば「表現」とは異なり意味ではなく、対象を直接指示する不特定な「指標」「機能」が特定されていなければ、指示される意味の志向ないし正常な理解も存在しないの

である。したがって指示される意味と直観とは互いに不可分な仕方で密接に関係し合っているのである。言い換えるならば指示される意味は直観の対象（すなわち話し手あるいは書き手自身）と混同されることはないが、それでもやはり特定の状況における直観とその対象に束縛された意味であることに変わりはない。フッサールは「私」の意味を理解する為に直観に充実や合致の役割を当てているというよりむしろ、意味を通じて志向された対象方向の確定の作業を割り当てているのである。おそらくこのような直観が『形式論理学と超越論的論理学』において、『論研』では十分に示されなかった「本質的に偶然的な表現」の問題に解決を与える地平的意識と呼ばれることになったのであろう。いずれにせよ、エバンスの解釈とは逆に、フッサールの「私」の正常な理解において意味志向のみならず直観は不可欠のものであるから、デリダの脱構築的所作、つまり「私」の正常な理解からの直観一般の排除はフッサールへの反論として成立していると私は思う。

ここまで「私」の意味の正常な理解に、エバンスの解釈とは異なり、フッサールは話し手を直観することを、不可欠としているということを詳述した。今度は指示される意味を導く直観ではなく、指示される意味そのものの無視というエバンスのデリダ批判を考察しよう。「指示される意味」とは、先に引用された『論研』第一研究の文「モノローグにおいて、『私』の意味は自分自身の人格の直接的表象において本質的に実現される」において既に現れていた。この文章中の「自分自身の人格の直接的表象」(unmittelbaren Vorstellung der eigenen Persönlichkeit)が、指示される意味であり、またそれは「自己表象」(Ichvorstellung)、「私」の「① 個体概念」(Individualbegriff von Ich)とも言い換えられる。この意味は既に明らかにされた通り、直観とその相関者である特定の対象に束縛された意味である。確かにエバンスの言うとおり、デリダは「指示される意味」に言及していない。しかもデリダは、書き手が不在であるばかりではなく、書き手が誰かすら直観されない書かれた「私」という語からしか与えられて

いない理解を、フツサールの異常であるという見解に抗して、正常であると主張するのであるから、彼は「私」の意味に関して、「指示する意味」しか考慮していないと言えよう。しかしデリダのこのような所作は果たして、単なるフツサールのテキストの脱落としやコンテキストの無視から生ずる性格のものであろうか。少なくとも私はそうは思わない。デリダの指示される意味への言及が欠けている理由は、彼自身の積極的主張に由来するものである。それは、エクリチュールにおける書き手の根源的不在という事である。このような彼の主張は以下のようなものだ。「直観の不在—それゆえ直観の主体の不在—は言説によって単に黙認されるのではなく、言説の構造をそれ自体として考察しさえすれば、意味作用一般の構造によって要求されているのである。(……) 発話の主体と対象の完全不在—作家の死あるいは／また作家が記述し得た諸々の対象の消失—は『意味志向』のテキストを妨げはしない」。「私」という語の指示される意味は語る主体や書き手に応じて変化する。とすれば指示される意味にとって語る主体や書き手の現前は本質的なものであろう。ところが、もしエクリチュールにおいてそして全く同様にパロールにおいて意味が理解されるにあたって一般的に書き手や話し手の現前が全く偶然性であるとしたりどうなるであろうか。答えは明らかだ。指示される意味というものは存在しないということになる。したがってエバンスの批判はこのようなデリダの積極的主張すなわち語る主体からの言語の自立性という脱構築的な所作に無関心であることから生じたと言えよう。

さて、私の見るところ、すでに第一章で言及した言語の対象の直観からの自立性はもとより、言語の語る主体や書き手からの自立性という見解は、フツサール自身の見解とも折り合うように思われる。その手掛かりは、表現記号を構成する語る主体並びに聴く主体の意識作用と表現記号そのものとの差異、及び意味志向作用と意味そのものとの差異にある。『論研』においてフツサールは次のように言う。「我々が任意の表現(例えば『平方剰余』)の意

味について問うことにより、この表現のもとで勿論、今ここにおいて述べられた音声的構築物、つまり一時的でそして同一的には決して反復されない音を思念しているのではない。(……)『平方剰余』という表現は、誰がそれを述べようと、同一のものである。また同じことが意味についての話題にもあてはまる。つまり、同一の表現ないし言語記号はその都度異なる話者の作用によって、また異なる時間、空間位置において、発話ないし記入され得るが、その存在そのものがその都度別のものとして個別化されるわけではない。表現記号はそういった話し手の変化および時間的位置の変化を通じて、常に同一のものとして同定される。それに対して語る主体の作用は本質的に時間的なものであり、各時間位置において個別化される。したがってフツサルが言う通り「私の判断は一時的な体験である。(……)。判断作用はその都度異なる」。言語のイデア的同一性と語る主体の変動とのこのような区別を、『経験と判断』における用語を使うなら、言語という存在者は「全時間的」存在者であって、時間において個別化されないと言ひ換えることができよう。言語は確かに世界の内で様々な素材へと「物体化」(Verkörperung)されるが、そのような受肉化によって時間的存在者の一種へと変化するのではない。それゆえ、ある特定の語る主体や書き手の言語使用によって物体化された同一の語が別の時間に別の人物の意味作用によって構成されようと、全く同一のものとして把握されねばならない。言語は記号も意味も全時間的であるが、語る主体や書き手の作用は本質的に時間的である。つまり同一の語はたとえ書き手や話し手が変化しても同一のものとして反復されねばならない。例えば、ある数学教師によって教室の黒板に描かれた知覚される三角形の図は、別の時間に別の学校で別の数学教師に描かれた同じ三角形と果たして異なるなどと言えるであろうか。更に別の数学教師が明日の授業の予習の為に頭の中で想像表象として同一の三角形を描いたとしても、その受肉化された三角形は全く同一の三角形と言われねばならない。幾何学的存在が全時間的に同一のものであるのと同様、言語もそのような存在性格を持つのである。

語る主体の現前に対する言語の自立性は言語が全時間的存在者であるということから理解される。意識作用と言語そのものという内容ないし対象との差異を混同してはならない。このようにして現象学的立場からも主体に対する言語の自立性という主張が可能となると私には思われる。

このような言語の自立性のその全時間的存在性からの主張を正当化する為に、他の哲学者達の見解も考慮しよう。例えば、パースは言語の全時間性とその時間的なものへの受肉化を「タイプ」と「トークン」という用語を用い、フッサールと全く同様の仕方で言い表している。英語の定冠詞 *the* が例えば英語の書物のあるページに10回出現しているとしよう。10個の *the* は確かに空間位置によって相互に隔てられて知覚される。しかしそれらは全て同一の記号として把握されねばならない。パースは同一のものとして同定される記号の存在をタイプと呼んだ。そしてそのタイプとしての *the* は「あるページにおいて可視的に存することは不可能であるし、あるいはいかなる声においても聞かれ得ない。というのもそれは単一の事物や単一の出来事ではないからだ」と彼は言う。また時間空間において「具体化された」(embodied) タイプを彼はトークンと呼んでいる。そのトークンは明らかにフッサールの全時間的なものの物体化に相当するであろう。したがってトークンも時間の中で個別化するものとして志向されるべきではない。パースもタイプという存在を言語に帰している限り、言語の全時間性を認めていると考えてよいだろう。とすれば、人称代名詞であれ、また指示詞といったいわゆる指標的機能を果す語のトークンも、時間的に個別化するものと直接対応することはないだろう。つまりトークンが例えば特定の語る主体のようなある一時点において特定化され得るもののみを、指示することはない。というのもトークン自体があらゆる時間位置において全く同じものとして同定されねばならないからである。

また私には、ウィトゲンシュタインも、言語はイデア性ないし全時間性を持ち、主体の現前とは非関与的な関係

しか持たないという見解を彼の『哲学的探求』において、暗黙の内にはあろうが、支持しているように思われる。彼はそこで「名前」(Name)の「意味」(Bedeutung)つまり言語内的な存在と、名前の「担い手」(Träger)つまり名前によって命名される実在する人物との混同を戒めている。彼によれば、実在の人物「N. N. 氏が死ぬは、人は、その名前の担い手が死んだ、と言うのであって、その名前の意味が死んだのだ、とは言わないのである。その名前の意味が死んだのだ、と言う事は無意味であろう。何故ならば、もし、そのように言うとなれば、名前は意味を持つことをやめ、『N. N. 氏は死んだ』と言う事は無意味になる」からだと言う。ウイトゲンシュタインがここで述べていることは、明確であろう。それはフレーゲと同様フッサールにも見いだせる対象と意味との厳密な差異性である。しかしここで最も注目すべきは、ウイトゲンシュタインが上記のように主張することによって言語の全時間性を無意識の内に語っていることである。つまり、上記の文は名前の対象である実際の人物は本質的に時間の中にある存在者である以上有有限的存在であり、死をまぬがえ得ないが、言語は自らの持つ全時間性によって永続し続けると主張しているように解釈できると私には思われる。

更にヘーゲルの『精神現象学』における「感覺的確信 このものと思ひ込み」という章は、とりわけ「本質的に偶然的な表現」に関わる「ここ」、「今」、の分析を言語との関係で考えている点で示唆的である。彼は感覺的確信の把握する個別的対象は感覺的確信そのものの真理ではないという。では感覺的確信の真理とは何か。それは感覺的確信の思い込みを通じて与えられる個別的対象を言語的に媒介することによって与えられる一般的なものである。例えば今の真理とは何か。感覺的確信に支えられて提示される解答は「今は夜である」という事になる。ヘーゲルはこの解答に対する吟味をエクリチュールによって行う。「われわれはこの真理を書きとめておこう(aufschreiben)。真理というものは書きとめられたからといって、消えるものではあるまいし、また貯えておいた

からといってなくなるものではあるまい。そこで、いま、この日中に、その書きとめられた真理をもう一度ながめてみると、われわれは、それが気のぬけたものになってしまっているといわなければならぬ²³。ヘーゲルによれば、感覚的確信の真理はエクリチュールの持つ弁証法化の働きの中にあると言えよう。彼にとつて今の真理とは書かれた、すなわち言語化された「今」という語の意味なのである。しかも「言葉 (Sprache) はこの真理 (一般的なもの) を言い表すだけであるから、われわれが思い込んでいるような感覚的存在を言い表しうるなどということは、到底ありえない」とされる。言語はそれゆえ時間的な個別の対象を語るのではなく、むしろ一般的なあるいは概念的な意味しか語らないとヘーゲルは理解しているのであろう。とすれば、このようなヘーゲル的な言語観から、「今」、「ここ」といった語ばかりではなく、「私」という人称代名詞についても、同じことが主張できることになる。そうすれば、「私」は一般的意味しか表さないとということになる。つまりフッサールの言う「指示する意味」しか「私」は持たないということとなる。「指示される意味」はヘーゲル的な言語の中には存在しない。ヘーゲル的な言語、エクリチュールにおいても書き手、ないし語る主体は不在であるといえよう。

これら三人の哲学者達はみな、言語というものの全時間的存在性、ないしイデア性を語っており、したがって個別的な語る主体の現前に応じて、言語がその都度個別化されるといふ見解を否定していると私は思う。

3 語る主体自身の心以外の指示対象を持つ一人称代名詞「私」

言語の自立性から帰結する、語る主体や書き手の語一般への現前の偶然性という考えからすれば、フッサールの主張するように今「願望を述べている『私はあなたの幸せを願う』という同一の語」の対象、つまり話し手の心的

作用である。「願望そのものがその都度異なるだけでなく、願望陳述の意味もその都度異なっている」ということはあり得ない。つまり、フツサールの見解とは異なり「私」という語の意味に、つまり全時間性を持つ物体化された言語の存在の内部に、現実の話し手に対応して変動すると言われる「指示される意味」、あるいは「自己表象」というものが属することはあり得ないのではないかとデリダに導かれつつ私は思う。したがって「指示される意味」は言語に属さない。あくまでも対象の変動を通じて同一の言語意味は不変である。モハンテイも『エドムント・フツサールの意味論』において、指示される意味とはフツサールが『イデーネン』以降「ノエマ」と呼ぶ内言語的「意義 Bedeutung」以外の意味すなわち直観の内容をも含めた広義の「意味 Sinn」概念に属するものであり、したがって前言語的意味であると考えている。言語としての「私」は徹頭徹尾全時間的存在として成立している。それゆえ、「私」はそれを語り書く主体自身とたとえ一瞬においても十分に合致しないということになろう。というのも、「私」の意味は「指示する意味」に相当するものだけであり、その意味は本質的に不定な対象しか指示し得ないからであり、また全時間的存在者が時間的存在者と合致するということは考えがたいからである。フツサールは、意味に客観的／主観的（つまり本質的に偶然的）という区別を付けたが、その事によって、言語一般がその記号面も意味面も含めて全時間性をもって初めて成立するという前提を忘却しないまでも、脆弱化してしまったのではないか。明らかに一人称代名詞「私」も言語のあらゆる時間で同一であるイデア性の関与をぬぎに使用されることはありえない。

虚構の「私」の場合を考えてみよう。例えば、コナンドイルの書いた小説の中で、シャーロック・ホームズがワトソン教授に手紙を出し、その手紙の中で「私はついに真犯人を見付けた」という文を使用しているとしよう。勿論この「私」は実際コナンドイルによって書かれたものだ。しかし読者は「私」という語の書き手をホームズであ

ると認める事なくしてこのテキストを理解することはできない。この場合「私」を誰が書いたかという問いの答えはホームズへと送られそしてまたコナンドイルへも送られる。「私」を虚構的に使用する事において指示される対象は二重化される。したがって「私」は書いた本人のみを指示するわけではないということが了承されるだろう。このことはパロールの状況においても言える。例えば舞台で俳優がホームズを演じていた場合、彼が語る「私」とは誰か。あきらかに俳優本人とそして役（ホームズ）をも指示しているであろう。「私」の指示対象はしたがってその語を語る主体とは発話状況においてさえ限らない場合がある。このことはたとえ一瞬でも言語としての「私」とそれを語る主体とが十全に合致しないというこれまでの論述を証明する一つの事例であると私は考える。

また、「私」という一人称代名詞に関して、その語の使用と自我の成立とが直結するという理論はなんらかの修正を余儀なくされるであろう。この語の用法には自分自身を指し示す事とは異なる振る舞いが属しているからである。

おそらく「私」が誰かを特定することは直観によってではなく言語内での別の語や文、例えば固有名（署名）や記述によって言語内コンテキストへと更に差し向けられる場合だけなのではないか。つまり永久に直観へと至らない他なる意味志向の不確かな連鎖の中で漂うことになるのではないか。勿論こういったコンテキストの形成すら偶然的ではあるが。

言語としての「私」と実在する私との間には超時間的存在者と内時間的存在者との関係への問いという古くそして新しい「分有」の問題が横たわっているように思われる。このことは一般に、人間にとって言語を使う事とは一体どういう事態かという問いへとつながるだろう。おそらくこれまで考察してきたなかでその問いの手掛かりとは偶然的であるということになるだろう。この暫定的に偶然性と呼ばれた事態をより詳細に考察してゆくことが私の

今後の課題となる。

註

この註において邦訳の参照指定をおこなっている引用箇所はすべて邦訳文を使わせて頂いた。

- (1) Edmund Husserl, *Husserliana Band XIX, Logische Untersuchungen*, Martinus Nijhoff, 1984, p.52. (以下 LU と略す)。
- (2) *ibid.*, p.44. 強調高井。
- (3) *ibid.*, p.73.
- (4) *ibid.*, p.66.
- (5) *ibid.*, p.540.
- (6) Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, PUF, 1967, p.102. (以下 VP と略す)。強調高井。マリタはこの「直観」という語を用いたところからこの直観はあくまでも「ソッサールの用語の範囲内で使用されている」ということを指摘している。
- (7) *ibid.*, p.108.
- (8) Husserl, *LU* p.73.
- (9) *ibid.*, p.87. 強調高井。
- (10) Derrida, *VP*, pp.107-108.
- (11) Husserl, *LU* p.88.
- (12) Derrida, *VP*, p.106.
- (13) J. Claude Evance, "Indication and Occasional Expression", 1995, in W.R. Mckenna and J.C. Evances (eds.), *Derrida and Phenomenology*, Kluwer Academic Publishers, 1995, p.57. (以下 IE と略す)。挿入高井。
- (14) Husserl, *LU* pp.552-553. (邦訳「立松弘孝訳『論理学研究』4、みすず書房、一九九〇年、三三一―三四頁)。
- (15) Evance, *IE*, p.57.
- (16) Husserl, *LU*, pp.555. (邦訳「三六頁」)。

言語の自律性と人称代名詞「私」——デリダの現象学的言語論について——

- (17) *ibid.*, pp.556-557. (邦訳 三八頁)。
- (18) Derrida, *VP*, P.104. 強調高井。
- (19) Husserl, *LU*, pp.48-49.
- (20) *Ibid.*, pp.49-50.
- (21) Chales Sanders Peirce, *Collected papers of Chales Sanders Peirce*, volume IV, The Belknap press of Harverd University Press, 1960. p.423. (4.537).
- (22) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, Shurkampe, 1984. p.261. (邦訳 黒崎宏訳・解説 『「哲学の探求」 読解』 産業図書 一九九七年 三三三頁)。
- (23) G.W.F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Felix Meiner Verlag Hamburg, 1980. p.64. (邦訳 樺山欽四郎訳 『精神現象学』 河出書房新社、昭和五五年 九版、六九頁)。
- (24) *ibid.*, p.65. (邦訳 同右)
- (25) Husserl, *LU*, p.85. 強調高井。